

健康文化

感謝のパーティ

今井田 二三子

肝移植という言葉は雑誌や講演で度々目にし、耳にすることはありましたが私にとって遠い所での医療のような思いがしていました。

最近、近くのM病院より、M病院で生体肝移植を受けた人、またM先生の尽力でオーストラリアや中国で移植を受けて、後療法や経過観察をM病院で受けられた人、また現在受けている人々の感謝のパーティが岐阜市内のホテルで行われるという案内があり、急に身近な医療に感じられ、これからの医療としては是非聞かなければという思いに駆られて出席しました。

一步会場に足を踏み入れたとき、何か何時もと違った雰囲気とでも申しましようか、出席者の方々の何かが無処かで一本に繋がっているような、同じ呼吸が会場一面に広がっているような気がしました。

M先生のスライドによる肝移植の現状の説明をお聴きして、あまりにも肝移植の現状を知らなさすぎたのを恥ずかしいと思うと共に、肝移植でなければ救うことのできない人々に対してのM先生の熱い思いに感動しました。

肝硬変による食道静脈瘤の破裂で、生きる望みを失われたA先生はご自身も医者であるがため、明日を語れない暗い絶望的な日々を送っておられたが移植の成功により、明日を語れる喜びを告げられると共に現職に復帰された今、この生命を使ってゆく方向を定めたと言われました。

ドナーの方、M先生、治療に当たられた病院の先生、スタッフの方に対する感謝の気持ちは聴く者の心にひしひしと迫るものがありました。

またお父様のドナーとなって自分の肝臓の一部を提供された青年の方は、未知の体験に対する不安と、そのリスクを思い揺れ動く心を訥々と語られ、手術は成功しお二人とも元気で「今になって、よかったですと思います」と結ばれた短い言葉の中に、決断に至るまでの迷い、家族愛の中で揺れる心の振幅が私の中

に伝わってくる気がしました。

肝癌、その摘出術、肝癌再発に対して動脈塞栓術、更に再々発、そしてM先生との出会いを語られるMHさん、M先生はその時点で移植ができるのも三ヶ月間が限度と告げられ、ドナーの関係で中国を選択され、MHさんの願いで中国へ同行されたが一番目の肝臓が不適合であったため一時帰国され、二番目の肝臓も不適合、三番目の肝臓で移植手術が決まり再び中国に出向かれ移植の成功を見届けて帰国されたが、MHさんは移植九日目に種々な事情で急遽退院、帰国ということになり、M先生はまた緊急医療器具を携えて中国に赴かれ、空港、機内で更に必要な処置を行われたと手記に書いておられます。

名古屋空港を飛び立つとき、眼下のゴルフ場のグリーンを見て二度と踏むことはできないかも知れないという思いがあっただけに生死を分けた移植手術に感慨は一入と語られました。

出席者のすべての方が、ドナーの方、その家族に対し、病院スタッフの方々に対し心から感謝の言葉を捧げておられました。

最初、会場に足を踏み入れた時感じたのは生命をつなぎ止めようとする家族、M先生、スタッフの方の熱い思いと、繋ぎ止められた生命で感謝の日々を送る人々の気持ちが会場一杯に満ち溢れていたのだと理解できました。

(内科開業医)